『無者キリスト』を読む （新宿集会にて）
第六転「十字架（ゴルゴタ）」
――第一部 キリストの実存十転――

２０２４年３月31日
弘野慶次郎

小池辰雄の証言集みたいなもの　十字架（ゴルゴタ）　十字架上のイエスの言「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

●小池辰雄の証言集みたいなもの

おはようございます。

「主が血を流したことによって私は生きた」というようなことが、この讃美歌を作った人の告白でもあったのだろうと、私は思います。いろんなことが人生にはありますので、何があっても、この主キリストの恵みは、本当に喜んで生きて行ける、そのような人にしてもらったのが、今日学ぶところの「十字架」というところです。

小池辰雄というのは、この新宿集会を作られた基の人ですから、その小池辰雄の受けられた信仰そのものをもう一度、一から学び直したいというのが私の思いなんです。何回読んでも聖書と同じで、昨日読んだ時と今日読んだ時とでも、また新しい思いをいただきますね。それほど豊かなものが聖書にはあります。小池辰雄の本にもそういうところが見られるので、何回読んでもそこから学ぶものが多いと私は思っています。

今日は「十字架（ゴルゴタ）」という所、112ページなんですけれども、ここを読んでも、小池辰雄の心情が吐露されている。ずうっと読んでいくと、小池個人の思いが吐露されている所があって、普通の聖書を解説している本には個人があまり出てこない。ところが、小池辰雄のこの本には、個人の思いがずっと出てきて――私たちが証言をしたりしますでしょ、あれと同じような形で――これは小池辰雄の証言集みたいなものですね。思いがずっと溢れて出ている。一応、体裁はいろいろとなっていますけれども、今日学ぶところの「十字架（ゴルゴタ）」という所も、小池辰雄が本当に十字架を受けとった歓びみたいなものが吐露されている所です。

●十字架（ゴルゴタ）

ではさっそく始めから読んでいきます。

《**第六転　十字架（ゴルゴタ）**

民の長老たち、祭司長たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔をされ、弟子の長ペテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、極悪人と同列に置かれ、悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、荊の冠をかぶせられ、血の雫と汗にまみれ、傷だらけの躯にされ、侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ、髑髏の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿りゆくイエス！

人間の、人類の、世界の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の悪魔的、地獄的、闘争的、擾乱的実相の逆徴が、イエスの十字架を負うこの姿に逆写されている。

十字架を負うイエスの他になお二人の悪人が死罪の故に各々十字架を負い、曳かれて行った。クレネ人シモンがイエスの十字架の一端を荷ってくれた。ゴルゴタにやっと到りつく。蒼白、凄惨、惨憺たる姿のイエス。だが、彼の胸の中を誰れが知る。やがて彼はぶっ倒され、「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」なる罪標のつけられた十字架に釘づけにされた。若き血潮が噴流する。イエスは今正に人生の真昼どき、三十路を過ぎたばかりである。》

最初の一行目から、

「……髑髏の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿りゆくイエス！」

と、ここまで文章が一つなんです。これは長い文章ですけれども、聖書に書いてある十字架の記事をここで簡潔にまとめてくれている。

「民の長老たち、祭司長たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、」

という人は、私たちは詳しく知りませんよ、どういうことをやっていたか。知らないけれども、要するにその当時の知識階級みたいな人たちでしょ。そういう知識階級の人たちと、それから

「ローマの官憲・兵卒などに敵視され、」

これはローマの支配下にありましたから。

「弟子どもに知らん顔をされ、」

弟子どもとは、我々と一緒ですよ。

「弟子の長ペテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、」

ペテロは三回「知らん」と言いました。ユダという人は、イエスが選んだ人ですけれども、「鬼才」と書いてある。頭が良かったのでしょうね。

「雷同的な民衆に棄てられ、」

民衆です。全部これは、全世界の人間ですよ。知識階級の人も、敵のローマ兵も、弟子どもも、民衆も、要するにみんながキリストを否んだということです。何もペテロだけが否

んだのではない。みんなが否んだということです。

そして、「罪標（すてふだ）」が書かれるけれども、

「政治犯、瀆神者（とくしんしゃ）ときめつけられ、」

神を本当にボロクソに否定して神に逆らっているという汚名をきさせられ、政治犯とか言われて、

「極悪人と同列に置かれ、」

これは「極悪人と同列」ですよ。十字架にかけられるというのは本当に極悪人です。「十字架に懸けられている」ということ自体が、もう近づきたくないですよ。私たちはやはり、殺人犯が死刑になるとかいう、そういう人たちに接したくないでしょ。それと同じくらいに極悪人にされているということは、これは大変な罪人なんですよ。そういうふうに見られていたわけでしょ。そういう人の味方になるということは、なかなかできないことでしょ。だから、ペテロが三度も否んだというのも当然のことだと思いますよね。凄い罪人だから、

「悪口雑言（あっこうぞうごん）を浴びせられ、唾（つば）きせられ、鞭打（むち）たれ、荊（いばら）の冠をかぶせられ、血の雫（しずく）と汗にまみれ、傷だらけの躯（むくろ）にされ、」

これは本当にボロボロの雑巾みたいなものですよ。

「侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ、髑髏（されこうべ）の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿（たど）りゆくイエス！」

「髑髏（されこうべ）の丘」とは髑髏（どくろ）の丘ということでしょ。そこには死刑囚が何回もここで十字架にかけられたと思う。だからひょっとしたら、髑髏がゴロゴロしているような、人の骨がゴロゴロしているような所ではなかったかなと私は推測するんです。こういう

「髑髏の丘」

という名前が付いているということは、やはりあまりきれいな所ではなかったでしょうね。刑場という所ですから、死刑にされた人の骨が棄てられていただろう。イエスはちゃんと葬られましたよ。弟子たちによって葬られたけれども、普通の罪人なんかは引き取る人もないから、その辺に放っておかれたのではないかなと私は思う。だから、「髑髏の丘」というのは具体的には何か臭いもするような汚い苦しい所ではなかったかなと思う。寄りつきたくないような所であった思う。そういう所に十字架を背負ってイエスが行かれたということを、この6行くらいで小池辰雄がまとめてこう書いてくれている。その次の所に、

「人間の、人類の、世界の、」

と書いている。人間一人びとりではないんですよ。人類そのもの、歴史そのもの、世界そのもの。もう人類が、すべての人、例外なしにすべての人ということです。全体の人類ということを言っている。個々の人も含まれる。そういう、

「どうにもならぬ不信の、」

と書いてあるでしょ。この「どうにもならぬ」という言葉は、次の

「忘恩、反逆、悪魔的、地獄的、闘争的、擾乱的（じょうらん）」

という所に全部かかるんです。

「どうにもならない不信、どうにもならない忘恩、どうにもならない反逆の悪魔的な、どうにもならない地獄的な、どうにもならない闘争的な、どうにもならない擾乱（じょうらん）的実相の逆徴」

と、書いてるでしょ。これが真実の姿ですよと言っている。

「人間の姿は本当にこういうどうにもならない、その姿が本当の姿で、人間の姿というのはそういうもので、それが実相ですよ」

と、書いてくれている。その実相の逆徴が、

「忘恩の、反逆の悪魔的、地獄的、闘争的、擾乱（じょうらん）的実相の逆徴が、イエスの十字架を負うこの姿に逆写（ぎゃくうつし）されている。」

と。

「十字架の姿の中に我々人類の本当にどうしようもない罪みたいなものが、イエスの姿に写されている」

と言っているわけです。十字架というのは、神さまから罰を受けている我々のために代わりにしてくださったということだから、

「我々のどうしようもない罪というのが、その実相がイエスの中に写っています」

ということを小池辰雄が言ってくれている。

「どうにもならない人間の罪の実相が、イエスの中に表れている」

ということをここで2行に渡って簡潔に書いてくれている。

そして、クレネ人シモンがイエスの十字架の一端を荷って助けてくれた。もう本当に力尽きてどうしようもない。イエスは、その十字架に付けられる三日ほど前から飲み食いもしていない。二日間か三日間、捕えられて穴の中に入れられたということを聞いたことがあるけれども。そういう所で、水もおそらくその二日間、飲むことも食べることもできなかった。だから、ヨレヨレになっておられたのではないかなと思う。それで、ゴルゴタにやっとたどり着くでしょ。

「ゴルゴタにやっと到りつく。蒼白、凄惨（せいさん）、惨憺（さんたん）たる姿のイエス。」

本当にボロボロだったんですよ、十字架にかかる前までも。食べていない、飲んでいないのだから。二日間、食べていないだけでも、もうヨレヨレになりますから、そういう本当に惨憺たるものだった。その前に鞭打たれていますよね。

「蒼白、凄惨（せいさん）、惨憺（さんたん）たる姿のイエス」

それは人間としてはとんでもないところに来た。

「だが、彼の胸の中を誰れが知る。」

誰もわからないですよ。本当に罪人になって曳かれていくわけですから、極悪人として

曳かれていくわけですから。その前に居る人も、彼の心の中なんて全然わからない。我々だって、イエスの心の中、イエスの思いなんて全然わからないですよ。

「この時だって誰もわからなかったよ」

ということを小池辰雄は書いている。

「やがて彼はぶっ倒され、「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」なる罪標（すてふだ）のつけられた十字架に釘づけにされた。若き血潮が噴流する。イエスは今正に人生の真昼どき、三十路（みそじ）を過ぎたばかりである。」

本当に青年イエスですよ。一番充実した、人生の中でも30代というのは充実した時期ですから。

「その三十路を過ぎたばかりのイエスの姿がこれであった」

ということを小池辰雄が簡単に書いてくれているけれども、これは小池の思いが出てます。

「人間の、人類の、世界の、どうにもならぬ不信の」

と書いてます。これは小池の本当に思いがここに出ているのだろうと思います。

●十字架上のイエスの言

《このイエスをはりつけにした十字架がドカンという地響きをたてて、掘った深穴の中に打ち立てられた。イエスの十字架の両側に、二人の悪人が同じく十字架された。

イエスは十字架の痛苦の極みの中で、彼を磔刑（たくけい）に処した人々を恨むどころか、

「父よ、彼らを赦（ゆる）してやってください。わきまえもない彼らの仕打ちを！」（私訳）

彼らのこの仕打ちは言語道断のわざである。彼らとは我々人間である。人間はいくら諭されても、教えられても、根底から変化するものではない。現象面では百面相のような変化があっても、本質面ではなかなか変わるものではない。神の人イエスを十字架につけたということは、人間がそれほどまでに失われた存在、どうしようもないものだということの自証に他ならない。それ故人間の救われる道は唯一つしかない。すなわち十字架のイエスが、自ら、我々を「ゆるす」という本願を告げ給う一途（いっと）だけである。それが今の十字架上のイエスの言であった。

万人は救を要する。ということは、万人はゆるされることを要する、ということを根底としているということである。イエスの十字架上での「赦し」は、人間の決定的な罪、すなわち人間がこの罪、かの罪を犯したなどという罪過のことではなく、神に対する不信、反逆のあらわれとして、神の子を極刑、死罪に処したという人類史上有るまじき極みの不信、冒瀆の罪に関わる根本的な罪の赦しなのである。この決定的な罪の赦しは、神と神の子キリストの他にはできない。それ故、イエスが十字架上で父に祈ったこの罪の「赦し」こそ、本願の劫力（ごうりき）をもっている。自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなったイエスのこの「赦し」こそ贖罪（あがない）の大愛である。敵を愛する愛の根底は、

イエスのこの愛にある。おのれを敵とした敵に対して救をもたらしたこの事実、この現実。これが愛の極みである。我々の過去、現在、未来の罪過一切をゆるしておられる十字架のキリストの砕けそのものによって、我々の心は始めて砕かれる。人間の心一切の問題は、この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けることによって、解決への道が拓かれてゆく。これを本当に身に受けた人は、人を「さばく」ことができなくなる。パリサイ根性がぬけてゆく。

人類の歴史を両断するこの「ゆるし」に圧倒され、キリストの大慈大悲に降参するとき、罪からの解放がその人に事実となる、現実となる、たましいの自由の境地が開示されてくる。》

ここの始めに、

「イエスをはりつけにした十字架がドカンという地響きをたてて、掘った深穴の中に打ち立てられた」

と書いてあるでしょ。聖書にはそんなことはひとつも書いてない。これは小池辰雄の思いですよ。「ドカーン！」という物凄い大きな地響きを立てて十字架が立ったという、小池辰雄の思いがここに出ていると思う。聖書には、そんな「ドカーン」という音は全然しなかったと思う。こういう所の小池辰雄の思いが本当に私はわかるんですよ。こういう表現しかしようがなかったというのが小池辰雄なんですよね。そのへんから私は、幼児みたいな人だなと思う。

「イエスは十字架の痛苦の極みの中で、彼を磔刑に処した人々を恨むどころか、

「父よ、彼らを赦してやってください。わきまえもない彼らの仕打ちを！」（私訳）」

もう何にも人間はわかってないんですよ、ということです。それをイエスは本当に心からわかっている。

「根本から人間というのは、煮ても焼いてもどうしようもないんだ」

ということを。だから、父に向かって、

「彼らは何もわかってない。自分を十字架につけたという意味も全然わかってない。だから、お父さん、彼らを赦してやってください。彼らは何もわかってないんですよ」

ということを言った。このゴルゴタの丘というのは、本当に声が聞こえるくらい近くでみな見ているんですよ。だから、この声が全部記録されている。今だったら、刑場というのは私たちの目から隠されているでしょ。どこで死刑が行われたのか全然わからない。でも、この当時はみんなに見せられるわけですから、その言葉が全部聞こえていたわけです。イエスの表情も全部わかっていたと思う。その近くで皆さんが見てたということです。

「父よ、彼らを赦してやってほしい」

というのは、本当に神さまの願いそのものを、人類にかける本願をそのままこの言葉にさ

れたんです。彼らを赦してやってくださいということを言った。

「彼らのこの仕打ちは言語道断のわざである。彼らとは我々人間である。」

そうなんですよ。聖書を読んでも客観的ですよ。何か映画を観ているみたいな感じです。ところが、その中に自分がいるということをここで小池辰雄はハッキリ言っている。

「彼らとは我々人間である」

と。自分もその中に居るんですよということを言っている。小池辰雄もその中に居るんですよということをここで言っている。

「人間はいくら諭されても、教えられても、根底から変化するものではない。」

そうなんです。人間はいくら諭されても、教えられても――教育があるでしょ――教育で、

「ちゃんとしなさいよ。人を騙したらダメですよ、物を盗ったらダメですよ、人を殺したらダメですよ」

と、教育でみな聞いてますよ。けれども、

「人間はいくら諭されても、教えられても、根底から変化するものではない」

という。「根底」と書いてあるでしょ。これは「絶対変わらない」ということですよ。何をしても変わらないということです。それが、

「根底から変化するものではない。現象面では百面相のような変化があっても、本質面ではなかなか変わるものではない。」

表面は、みな社会生活をするけれども、ちゃんとした挨拶もするし、服も着るし、ちゃんとした生活をしてます。けれども、何かあった場合は、根底は変わらないものだから、本当にこの十字架に付けた姿と一緒ですよということを言っている。

「現象面では百面相のような変化があっても、本質面では根底は絶対に変わらない。

なかなか変わるものではない」

と書いてますけれども、私は

「絶対に変わるものではない」

と代えて読みます。小池辰雄もこれは「なかなか」というふうなことを言ってますけれども、これは「絶対に」という言葉の方がいいと思う。

「根底から変化するものではない」

と小池の前の文章があるように、ここは

「本質面では絶対に変わるものではない」

ということ。本当は小池もこういうふうに書きたかったけれども、何かこう書いてしまったんですね。

「神の人イエスを十字架につけたということは、人間がそれほどまでに失われた存在、どうしようもないものだということの自証に他ならない。」

もう何遍も繰り返し繰り返し
「どうしようもないんですよ」
ということを、小池辰雄は言う。人間は「失われた存在」というのは、
「神さまから失われた存在」
という意味ですよ。神さまから見捨てられた存在、どうしようもない存在だということの自証に他ならないと。
「それ故人間の救われる道は唯一つしかない。」
道はただ一つ、イエスの道はもう本当に一つしかない。それは、
「すなわち十字架のイエスが、自ら、我々を「ゆるす」という本願を告げ給う一途（いっと）だけである。」
ここに「本願」という言葉が出てきます。これが、
「父よ、彼らを赦してください」
と、神さまにイエスが頼んでいる。これが本願ですよ。そういう
「我々を「ゆるす」という本願を告げ給う一途（いっと）」
もう本願で赦してやってほしいという、その本願が成立しなければ、我々はどうしようもないということを小池辰雄は言っている。
「それが今の十字架上のイエスの言であった。」
十字架の言葉の最後に、十字架に懸けられながら、神さまの本願をイエスは吐露している。
「もう赦してやってください」
という、これが神さまの本願ですよ。赦すというのが神さまの本願。もう本当に人間が神の子になることが本願です。光の子、神の子になることが本願なんです。それは、イエスということがなければ成立しないということで、
「我々を「ゆるす」という本願を告げ給う一途（いっと）だけである。それが今の十字架上のイエスの言であった。」
という。この言葉が最高の言葉なんです。神さまの本願の言葉なんですね。
「万人は救を要する。ということは、万人はゆるされることを要する
教会では「救われる、救われる」とよく言います。
「救を要するということは、万人はゆるされることを要する」
ということ。「赦し」ということが根本的ですよということを言っている。「救われる」ということは、赦しがなかったら救われるということはないということです。
ということを根底としているということである。」
「根底」とか「根本」とか「本質」とか、こういう言葉を小池辰雄は言うでしょ。
「根底から変化するものでない」
とか。

「万人がゆるされるということを要するということを根底としている」とか。この「本質」ということをこの「根底」という言葉で小池は表現する。その次にも、

「根本的な罪の赦し」

と書いてありますでしょ。これは根底からゆるすということ。

「この決定的な罪の赦し」

という。これも「根本的な」という意味と同じですよ。だから、「根底から」とか「本質」とか「根本的」とか、言葉を変えてますけれども、

「本質、本当の根っこの根っこから罪の赦しというのがなかったら、我々はどうしようもないんだ」

ということで、こういう言葉を使うわけです。言葉を変えて重ねて、「根底」とか「決定的」とか「本質」とか、こういう言葉を小池辰雄は使って表現してくれている。これも、小池辰雄が

「自分が十字架で赦された」

という、その歓びの思い、

「もうこれしかない」

ということで、こういう言葉が次から次へと出てくる。同じ言葉を使わないけれども、言葉としては違う言葉を使っていますけれども、もう言いたいことは、本当に

「根本から、根底から」

ということを言いたいわけです。

「この決定的な罪の赦しは、神と神の子キリストの他にはできない。」

それ以外の人はできない。もう罪のないイエスにしか「赦す」ということはできないということです。

「神に対する不信、反逆のあらわれ」

これは「反逆」と書いてありますけれども、本当に「敵」ということですよ。人間と神さまとは敵ということなんです。

「それ故、イエスが十字架上で父に祈ったこの罪の「赦し」こそ、」

十字架上でイエスは祈られる、「赦してやってほしい」ということを十字架上で言うわけでしょ。

「この罪の「赦し」こそ、本願の劫力（ごうりき）をもっている。」

本願の力強い願いがそこにこもっているんですよ、ということ。

「本願の劫力をもっている」

と。本当に神さまの本当の願い――「本願」の「本」は「もとの」という意味ですよ――根底の願いということでしょ。根底の願いは凄い大きな力を持っていますよということをここで言っている。ちょっと読んだらわかりにくい。

「本願の劫力」
をスルスルと読んでしまいますけれども、
「根本的な神さまの本当の赦しの願いですよ」
ということです。
「自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなったイエスのこの「赦し」こそ贖罪（あがない）の大愛である。」
自分では償い得ない。どんな罪も償いえない。もう神さまに赦してもらうしかない。
「自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなったイエスのこの「赦し」こそ贖罪（あがない）の大愛である。敵を愛する愛の根底は、イエスのこの愛にある。
ここにも「根底」という言葉が出てきます。
おのれを敵とした敵に対して救をもたらしたこの事実、この現実。
これは「事実」なんです。決して思われた世界ではない。「ゆるす」ということは、キリストが十字架につけられたその現実があるということです。
「これは本当に歴史的に起こった事、事実ですよ」
ということを言っている。
仏教だったら、親鸞のあれなんかは観念的なんです。まず血を流すということもない。思われた世界の、まだ仏教の言葉は。やはり仏教でも凄い人がおられて、霊的に感じたから、こう書いているけれども。このイエスの神さまは本当に現実として、我々の歴史的に起こったこと。だから、
「この赦しというのが凄い赦しなんですよ」
ということをここで言う。
これが愛の極みである。
本当に「ゆるす」ということが愛の極みである。
我々の過去、現在、未来の罪過一切をゆるしておられる
「過去・現在・未来」というのは、わかりやすいけれども、もう人生そのもの、我々の人生そのものをゆるしておられる。
十字架のキリストの砕けそのものによって、
小池は、「十字架でイエスが砕かれた」という表現をします。だから、ここで
十字架のキリストの砕けそのものによって、我々の心は始めて砕かれる。」
という。これは重要なことなんです。我々は砕けきれないですよ。
「根底からはどうしようもない」
と書いてますでしょ。砕けきれないのが我々人間の姿なんです。だから、
「十字架のイエスの砕けをもらって」
と小池は言うでしょ。我々は砕かれないから、砕かれてくださったイエスを受け入れると

いうことで、「砕けをもらった、砕けを賜った」という表現を小池はします。我々の心は初めて――初めてですよ――十字架で我々は砕かれるんだということです。砕けきれない我々の十字架を、キリストが砕かれてくださったその「砕け」を我々は賜ったということなんです。

人間の心一切の問題は、この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けることによって、ここにも「無条件」という言葉が出ているでしょ。絶対無条件なんです。

この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けることによって、解決への道が拓(ひら)かれてゆく。

これも小池だったら言いますよ、

「絶対無条件だ」

という言葉を小池は使いました。何か条件を付けて赦されるのではない。これは無条件なんです。だから、考えて書いてませんけれども、小池の今までのものを読んでいると、絶対無条件の赦しです。もう「ああだ、こうだ」という赦しではなく、条件は一切付いてない。人間であれば無条件に赦されているんだということです。

解決への道が拓(ひら)かれてゆく。これを本当に身に受けた人は、

ここに「身に受けた人」とある。小池は身に受けている。自分は存在としてもうわかったんです。存在としてわかったから、

本当に身に受けた人は、人を「さばく」ことができなくなる。パリサイ根性がぬけてゆく。

本当に身に受けて欲しいというのが小池の願いなんです。

「私のように本当に十字架を身をもって受けとって欲しい」

という。

これを本当に身に受けた人は、

自分のことですよ、小池辰雄のことです。本当に身に受けた小池辰雄は、

人を「さばく」ことができなくなった。パリサイ根性がぬけていった。

という、小池の告白です。小池辰雄のことですよ、これは。本当に身に受けた私小池辰雄は、さばくことができなくなった。パリサイ根性が抜けていったというのが小池辰雄のことです。これは第三人称的に書いてますけれども、小池の思いですよ。

人類の歴史を両断するこの「ゆるし」に圧倒され、

ここに「人類の歴史を両断する」と書いてましょ。旧約聖霊から新約聖書にころっと変ってしまった。もう旧約みたいに神さまの律法を自分の力でする必要はなくなったんです。

「もう信仰だけになってしまいました。キリストが全部なされたから、そのキリストを受けとるだけですよ」

ということが、「人類の歴史を両断した」ということ。だから、暦の上で「西暦」というの

がここから始まったでしょ。小池は「私はこのゆるしに圧倒されたんですよ」と。

キリストの大慈大悲に降参するとき、

「圧倒されて、どうしようもない。もう降参するしかない」というのが小池の思いです。自分のことを言っているんですよ、全部、小池は。キリストの大慈大悲に圧倒されて降参したから、解放されて、

罪からの解放がその人に事実となる、現実となる、

「その人に」と第三人称で書いてますけれども、小池辰雄は

「圧倒されて降参して、罪から解放された事実になってしまいました」

ということを言っている。事実となりました、現実となりましたと。そして、小池は、

たましいの自由の境地が開示されていきました。」

と言っている。これは三人称で書いていたら、あなた方もそうですよというふうなニュアンスになりますけれども、これは小池辰雄が主語ですよ、ここでは全部。ここを読んでいくと、全部、小池辰雄が主語なんです。

「私はこの人類を両断するゆるしに圧倒されました。キリストの大慈大悲に降参しました。罪から解放されました。そして、私はそういう事実、現実として生きています。たましいの自由の境地が開示されました」

というのが小池辰雄の本当の告白なんです。これは本ですから、一応、第三人称的に書いてますけれども、決してこれは小池は第三人称的に言っているのではないということです。

●「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

《多くの人は法律的犯罪者ではない。然し、その可能性は万人がもっており、宗教的には万人は罪びとである。「罪の価は死なり」で、宗教的には、万人はこの死刑囚とかわりがない。そのことはキリストの「山上の垂訓」の言にあきらかである。さればこそ、この罪を贖うために、キリストは、聖意を体して自らを十字架にかけられるままになさったわけである。だから、イエスは「われは自ら棄てるのだ」と言ったのである。罪なきイエスは、霊化して、いきなり天界に昇ることができたのであるが、ゲッセマネの祈りにおいて、贖罪の大義・大愛・神義・神愛を無条件に体受し給うて、

「わが意志に非ず、汝の意志を〔この身を貫いて〕成就し給え」

と挺身の祈りをなして、十字架への道を決然として執り給うたのである。

十字架上の二人の悪人は、贖罪愛の十字架のイエスを、右にまた左に目（ま）のあたり見ながら、一方の男はこれを拒み、他方の男はこの前に平伏している。

一方の悪人はイエスを罵（ののし）って、ふてくされた言葉を吐いた。他方の悪人は今度はイエスに向って、

「み国にお入りになるとき、〔せめても〕私を憶えてください」

と（現行訳は「御国の権威をもっておいでになるときに」とある）、心情を吐露して願った。人間の交りの世界でも、いつまでも友人に憶えられているということは、大きな慰めである。況（ま）してや、神の子キリストに憶えていただくことは、この悪人にとって、存在的な救いにあずかることである。神を畏れる砕けの心から滲み出た悪人の平伏しの悲願は、イエスの本願の心の緒琴（おごと）の琴線に深く触れたのである。この悲願に対して、イエスの本願はなんとひびき出たか。

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」（私訳）

これほどなぐさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛の言葉があろうか。私には正直なところ、これがイエスの言の中の最愛の言である。私の全存在はこの言に荷われている。抱かれている。私は愛に飢え渇いている男だ。力あるイエスの愛。決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生かしめるイエスの愛！　私はこの愛で生きている。呼吸している。今日も、明日も、次の日も。地上にある限り、毎日毎日がイエスと共にパラダイスなのである。しかし私は人間だ、私は弱い。時折ぶっ倒れたくなる。その時イエスの足もとに。彼は抱き、ふところに入れてくださる。その時キリストと私は一つだ。パラダイスだ！

「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

これが私の根源現実である。きよいのきよくないの、義しいの義しくないの、そんな品さだめの世界は私の存知せぬものだ。イエスは私の万斛（ばんこく）の涙を御存知だ。それだけでいいのだ。

私が死んだら、十字架の木の柱を立てて、このキリストの一言を墨書してもらいたい。その十字架は雨露に曝されながら、枯木の如く龍吟して、

「旅人よ、友よ、
キリストの大愛に生きよ。
パラダイスで待っているよ。」

とささやくであろう。

噫（ああ）、この悪人に告げ給いし十字架のイエスの一言。何たる福音か。マイナス九九でもあったであろう彼は、生涯の最後の瞬間に砕けの一に立ち帰った。イエスはこの小さな芥種一粒の信をハタと受けとめ、そこに彼の全人的なひびきを見て、無条件、全的に福音の言を投げ、彼を全的に包み、抱いて、天に昇せてしまった。

人間の善悪が何だ。

「我らの義はことごとく汚れたる衣の如し」

とイザヤも言っているではないか。潔・不潔、義・不義ときめつけ、品定めするパリサイ根性をキリストは斥けた。イエスは全的に自分をぶちまけて、あるがままで向っ

てくる在り方、イエスの前に降参し、イエスのふところに投身し、全托する全人的な在り方を無条件に受け入れ給う。

まことに、イエスと共に、いの一番に、天国に入った者は、一方の十字架の悪人であった。福音を端的に語る事実として、これ以上の劇的なものがあろうか。キリストなる哉、イエスなる哉、福音なる哉。

この十字架上の悪人往生の事態に瞑合する言を東方の親鸞が吐露しているではないか。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあずけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐる程の悪なきがゆへにと。」（『歎異抄』）

昔、「鈴ヶ森のお春殺し」という殺人犯、石井藤吉という人があった。彼はルカ二三・三四にぶつかって、こう懺悔している。

「『イエスいひけるは、父よ、彼らをゆるし給へ。そのなすところを知らざればなり』。私の心には、この一節の、誠に僅かなお言葉が、五寸釘を打たれるよりもなお強くしみ込みました。そもそもこの一言にて、私はイエス・キリストの、御愛と申しましょうか、御慈悲と申しましょうか、それを誠に何ともいうことのできない程有難く信ずることが出来ました。またこの御一言にて私は聖書の中の全部を信ずることができました。」

ゴルゴタの十字架を見おろしていた天は暗澹としてきた。昼の十二時というのに、暗雲全天を蔽い、天地晦冥である。かくて午後の三時に及んだ。イエスの血は滴りつづけ、生命の限界に達した。そのときイエスは叫んだ。

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」

（「神よ、神よ、何で私をお棄てになった」）（私訳）

地のすべての者に棄てられ、ついに神にすら棄てられた天涯孤独の叫びは独語ではない。絶対に信頼し抜いた神への叫びである。それゆえに、これは信頼の極限の叫びである。そしてこれは、聖意を体現し、神を義とし奉って貫いた彼の在り方、神とキリストとの義の関係、実に天地を貫く神の義が立つか倒れるかの叫びであった。神の義――神意体現――の事態が無視されてなるものかの抗議。イエスのこの叫びあってこその「ゆるし」なのである。神の義と神の愛は、正に十字架の縦棒（義）と横棒（愛）のクロスしている組合わせが象徴している。キリストの義は、人を審く義ではない。

与える義として愛に転ずる。義が砕かれて愛となっている。単なる痛みではなく、砕けて愛に溶ける。矛盾を渾然（こんぜん）たる義愛一如となしている。それを贖罪愛という。

この神の義体現の叫びのあとで、イエスは絶叫した。誰もその絶叫の意味を知らない。それは高次の異言であった。霊言そのものであった。さればこの絶叫がエルサレムの天地に響くや、神殿の聖所と至聖所の間の幕が真二つに裂けてしまった。これは旧約宗教の突破とその成就を宣言する徴であった。自ら大祭司となり、自ら屠（ほふ）られた羔（こひつじ）となったイエスは、旧約の、イザヤ書第五三章の預言を絶頂とする贖罪の宗教を全うしたのである。

その後で、

「父よ、私の霊をみ手におゆだねします」

と投げ身の祈りをなさった。大往生の平安の響きであった。この情景を終始監視していたローマの百卒長もついに感嘆のあまり告白した。

「本当にこの人は神の子であった」

これらの凄惨（せいさん）な情景を、畏れと悲しみの中で、涙ながらに、遠くまた近くに看まもっていたのは、ガリラヤの方面からはるばる従ってきた女達であった。母マリヤとマグダラのマリヤは特に十字架の近くに侍（はべ）っていた。母マリヤの胸は、シメオンの預言の如く、剣で貫かれるおもいであったろう。深い魂の傷をいやされたマグダラのマリヤの心は十字架の主にとりすがっていたのであろう。その心境をロダンが大胆に彫刻で表現している。》

最後のところです。

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」

（「神よ、神よ、何で私をお棄てになった」）

これはイエスが代表して言ってくださっている。我々は棄てられている人間なんですよ、十字架がなかったら。これは代表してイエスが言ってくださったんですよ。我々の罪のためにイエスが十字架にかかられたということは、我々はこのまま十字架がなかったら、棄てられた存在なんです。だから、代表して、

「神よ、神よ、何で私をお棄てになった」

と。こういうことは、十字架を受けとる前はわからない。イエスだけが天涯孤独だということですけれども、

「我々が神から棄てられている存在なんですよ、十字架がなかったら」

そういうことをイエスが代表して言ってくださったんだとちがうかなと、私は理解しているんです。

「絶対に信頼し抜いた神への叫びである」

と。けれども、本当に我々の罪びととしては、そこにかかられたから、我々は棄てられて

も当然な人間なんです。それをイエスは言ってくださったんだなと私は思います。我々は本当に神に棄てられる存在にすぎない。それをイエスが十字架にかかって、棄てられない存在に変えられていった。だから、

「今日、私と一緒にパラダイスにお前は居るんだよ」

ということを仰ってくださった。

ここに「義の叫び」と書いてある。

「これは信頼の極限の叫び」

信頼ぬいた神への叫びがこの言葉だったということです。

「神とキリストとの義の関係、実に天地を貫く神の義が立つか倒れるかの叫びであった。」

と。最後には、

「父よ、私の霊をみ手におゆだねします」

と言って、イエスは父の懐に入っていきます。

「神の義の事態が無視されてなるものか」

という抗議の叫びであると小池が言っている。

「イエスのこの叫びあってこその「ゆるし」なのである。……与える義として愛に転ずる。義が砕かれて愛となっている。」

と。しかし、ここに

「イエスは絶叫した。誰もその絶叫の意味を知らない。」

と書いてある。本当にキリストの言葉なんて全然、我々にはわからないという意味ですよ。本当に我々にはわからない。キリストの本願の深い深いその愛のところまで、我々はとてもわかることはできない。ただ本当に十字架をありがたく受けとる以外には方法はないんです。だから、さっき引用されたように、

「弥陀の念仏以外の他の善は要らない。念仏にまさるべき善はないゆえに」

と言うように、

「信仰だけでＯＫなんですよ」

ということをパウロも言ってますでしょ。「信仰、信仰」と言っているでしょ。けれども、「信仰、信仰」と言って表面的に受けとるのではない。小池辰雄がこれだけ体験したことを詳しく吐露してくれてるから、これが本当の信仰の前提になるところです。

今日のこの「ゴルゴタ」というところは、本当に小池の体験した十字架の神髄みたいなものを吐露してくれているところでした。それが今回学んだことでした。ということで終わりたいと思います。